

福祉系 対人援助職養成の 現場から²⁵

西川 友理

「大人になるってどういうこと？」

子どもに関する授業をする時に、「大人になるとはどういうことか」というトピックを学生に問いかけ、考えてもらうことがあります。これが結構面白いのです。

学生たちは頭をひねります。

「タバコや酒が解禁されたら大人！」

「それって電車料金が大人料金になったから大人、って言ってるようなもんやんか！」

「ああ、それに18歳から選挙が出来るようになったよな。20歳になったら成人になって…あれ？成人と大人って一緒？」

「20歳を超えたら大人、というわけじゃないように思うわ。私、21歳やけど、全然自

覚ないもん。」

「俺も自分の事まだまだ子どもやと思うけど…どうやら、世間的には大人って見られるよなあ…」

「飲み屋で、感情的に怒鳴っているおっちゃんて、子どもっぽいしな。うーん、大人になるって、どういう事やる…？」

20歳前後の学生の多くは、自分の年齢と引き比べて色々と考えます。それぞれで出てきた答えを発表してもらいます。

「一人でちゃんと何でも出来るようになること…ですかね。」

「自分の食い扶持を稼げるようになることかなあ。」

「自覚の問題かなあ…自分で、自立したって思ったら大人！」

「自分で自分の責任をとれるようになること。30歳や40歳を過ぎても、大人になれてない人はなれてない！」

この問いかけは10年以上前からやっていますが、このような答えが最も多いです。しかし一昨年前ぐらいから、少しずつ傾向が変わりつつあるのです。

ほとんどの学生は上記のように答えるのですが、その中に、

「色んな人達と一緒に世の中を渡っていけるようになることだと思います。」

「周りの人と、うまくやっていける力を得られるようになること。」

「最低限のモラルやマナーがあって、多くの人と協働できるようになること、かな？」という答えが出てきているのです。

つまり、その個人が単体で自立できるようになること、というイメージの答えが多い中に、少しずつ、他者と共に居れるような社会性や協調性があること、他者とのつながりをつくれること、という答えが混じるようになってきているのです。

これが、1つの学校や1つのクラスから出るだけなら、その学校・その学科のポリシーが反映されているのかなと思うのですが、どうも複数の学校で、この傾向が見えて来ています。

つながること=大人になること？

以前、10人ほどから成る大学生のあるグループに関わった時、その内の約半数から、ほぼ同時期にこっそりと、人間関係や進路についての悩み相談を受けました。皆、口をそろえて言っていた事は、

「こんな話、グループメンバーには出来な

いよ。皆そんなところまで考えていないと思う」

という言葉でした。

似たような悩みをもちつつ、それぞれが友人同士に打ち明けたり相談したりせず、あまりにそっくりな言葉を、「誰にも言わないでね」と、私に打ち明けてきました。

そのグループ内部では、問題らしき問題も発生しません。ただなんとなく関係性がズレたまま固定化されて、それぞれの中に、皆には内緒のストレスがくすぶっていたような状態でした。グループメンバーは、やがてそのストレス環境に慣れ、どうでもよくなったようで、波風立つ事もなく何となく、ちいさなグループに分かれて過ごし始めました。

自分が居る場所がある安心感と、その場所を維持させるための努力に、みんな疲弊し、腐ったようになっていました。

確かに私達は、気が合い、気を許しあえる仲間がいると安心します。そういう仲間にも困られている、自分の居場所を確保したいという欲求があり、何人かがつながりある事で「居場所」が形成されていきます。

上記のグループの学生達は、協力して、傷つけあわない人達のいる場所を作り出して、いわば自分にとって安全地帯のようなものを故意につくろうとしていたようでした。

しかし当然ながら、誰かとコミュニケーションをとる上で、絶対に相手を傷つけたり、傷つけられたりしないという事はありません。

LINEやTwitter、Facebookなどのインターネットを利用したSNSは、今や生活に欠かせないインフラのひとつといってもい

いほど普及しています。私もいくつか利用していますが、確かに便利で、楽しいものだと感じます。

一方で SNS を発端としたトラブルについては、改めて書くまでもありません。言葉ひとつのやり取りが、後々まで人間関係の諸問題に発展したり、時には犯罪を引き起こしたりします。

単純な「人間関係のこじれ」だけでなく、巧みにクローズされた情報と不用意にオープンになっている情報があり、それぞれの持つ情報の量や質には極端に差があり、そのせいで誤解が生じやすくなります。

そこで、相手の腹をさぐりながら、次の行動をとるという方法を選択し、ストレスを貯め込んでいきます。大変精神的に疲れる作業ではありますが、多くの学生たちにとっては、相手に踏み込んだり、相手に踏み込まれたりするよりは、ずっと軽いストレスだと捉えるようです。

学生に、仲間内での SNS の使い方を聞いてみると、思ったよりもずっと様々なことを勘案し、判断し、できるだけお互い傷つけないようなコミュニケーションをとる方法を探っているように感じます。また、インターネット以外のコミュニケーションの場でも、そういった気遣いをきめ細かくしています。そうしないと、仲間内の輪からいつはずされてしまうのか、わからないからです。

学生が利用する SNS のコミュニケーションからも推察出来るように、彼らにとって居場所として自ら形成するコミュニティはまた、傷ついたり傷つけられたりしないように、緊張と細心の注意をはらって過ごす場所でもあるのです。そのつながりは、変化をする事を極端におそれる、発展性の

弱いつながりだといえるかもしれません。

それでも、どんなに居心地が悪くても、孤独でいるよりは、何らかの関わりがある方が安心だし、よほどのことがないかぎり、不平不満や意見を言わないように、気をつけているように見えます。

冒頭に挙げた「大人になるとはどういうことか」という問いかけに対し、「他者とつながること」と答えていた学生は、仲間内の SNS のつながりのような、緊張感のあるつながりを作ることを指して大人になる。と言っていたのでしょうか。

つながりの発展性

時々、居心地の悪い、緊張感の高いコミュニケーションを自分で自分に強いている学生が、疲れや焦りを感じ、個別で相談に来ることがあるのです。そのようなコミュニティだけで過ごしている人を見ては、「子どもみたいだ」と揶揄しつつも、自分も似たようなメンタリティがあるとひそかに落ち込んだりしているのです。

学生達は、何となく一緒にいて、何となく誰かの方向性に合わせるような、発展性のない「同調」と、お互いに遠慮なく皆で話し合いや意見交換ができる発展性のある「協調」とは違う、ということは気づいているのです。気づいているけれど、付和雷同を辞められない、という悩みを抱えている学生も多くいるようなのです。

この状況を踏まえると、冒頭に挙げたとおり、学生らにとって「大人になる」とは、「色んな人達と一緒に世の中を渡っていきるようになること」

「周りの人と、うまくやっていける力を得られるようになること」

「最低限のモラルやマナーがあって、多くの人と協働できるようになること」なのですが、

これはそれぞれ、

「『自分の身内だけではない』色んな人達と一緒に世の中を渡っていけるようになること」

「『自分と違う生活や違う考え方をして来た』周りの人とも、うまくやっていける力を得られるようになること」

「最低限のモラルやマナーが『擦り合わせできて、その合意形成のプロセスが』あって、多くの人と協働できるようになること」とでもいうような、『自分とは全く違う考え方の人ともつながっていき、理解しあおうとする事』を指しているように感じます。

発展性を感じるつながりに勇気を出して自ら飛び込み、そうして大人として成熟していきたいと行動する学生もいます。勇気を出したいと思いつつも難しく、「子どものままでいたい」とでもいうような対応をする学生もいます。背を向けてしまう学生も、もがいている最中なのです。

20歳前後という歳で、単なる自立だけではなく、社会性のあるつながりの大切さを認識し、それに対して怖さを感じつつも、自分なりに何とか対処しようという傾向があることに、私は、「今の学生は凄いなあ…」と感心するのです。

学生の変化を 学習指導要領と社会の動向から見る

ところでなぜ、このような傾向が出てきているのでしょうか。

様々に理由はあると思いますが、私は、小中学校の頃に受けた教育と、その当時の社会情勢が大きく影響しているのではないかと考えています。私は教育学の専門家ではないので、手っ取り早く学習指導要領を概観してみようと思います。

戦後、学校現場に提示された学習指導要領は、現在までにその時々的情勢にあわせて何度も改訂されています。最初は1947年に文部科学省の試案として作成されたもので、アメリカ的な児童中心主義の教育観に基づいて作られたものでした。これを実際に運用してみると、戦前教育を受けた子どもたちに比べて、戦後の教育を受けた子どもたちは、読み書き能力が極端に低下するということがおこり、児童・生徒の保護者から不満の声が上がりました。このような声に答え、学習指導要領は1958年に大幅に改定されました。

1958年の改訂では、基礎学力の向上を目指して、教育課程の最低基準を示し、のちに「詰め込み教育」と揶揄される学習時間の増加が図られました。試案という言葉がなくなり、一定の法的拘束性をもつものとなりました。そしてあらたに、道徳の時間が設けられました。これにより、教育に対する国の標準化が図られたと言えます。その後、詰め込み教育の反省から何度か改訂が行われましたが、科学文明の発達に伴い、内容自体は高度になる一方でした。

1973年のオイルショックを経て、経済が停滞した1977年に、いわゆる「ゆとり教育」への転換を図った改訂が実施されました。この改訂は、「ゆとりの時間の設定」などの

ように、科目の新設とか、授業時間数の改正といった、実際の・具体的な変更事項もありましたが、大きくは「ゆとりと充実」という理念的・抽象的な方向転換が中心でした。ですから、「何をどうすればゆとり教育になるのか」といった解釈があいまいな部分が多かったようです。「ゆとりの時間」として設定された授業時間も、その多くは他科目の授業の補習などに充てられていたという状況があったようです。

1989年に改訂され、1992年から1993年にかけて適用された学習指導要領には、個性や人間性の重視はそのままに、今度は「新学力観」という考え方が新たに提示されました。これは、「個性をいかす教育」を目指して設定されたものです。

1998年の改訂は、当時ショッキングな少年犯罪が多発したことなどをふまえ、心の教育に力を入れる事を目途に、「生きる力」というキーワードを軸に、ゆとり路線をさらに推し進めていくような内容になりました。この時の改訂は、「個性をいかす教育」がなんとなく定着した現場に対し、当時の子どもたちの学力低下への対応として考えられたものでした。これを受けた改訂の内容は、観点別学習状況の評価だけではなく評定にも絶対評価がとりいれられたり、総合的な学習の時間がスタートしたりと、かなり話題になりました。また特にこの時、改訂内容の一部である「円周率が3.14から『およそ3』という表示になる」「台形の公式が教科書からなくなる」等がメディアで随分話題になりました。おりから大学生の学力が低下しているという問題が指摘されており、「ゆとり教育」の方向は間違えているのではないかという議論が全国的に巻き起こりました。ゆとり教育を推進すること

でむしろ学力は伸びるはずだという意見の識者もおり、ゆとり教育と学力の低下に関する論争は白熱化しました。

しかし、1998年の改訂案が出されてから、それが2002年に小中学校で実施されるまでの間に、一般国民には「ゆとり教育=悪」のイメージが徐々に、確実に刷り込まれたと言えます。

2008年に行われた改訂の際には、「ゆとり教育」からの明確な転換がはかられました。「これからの教育はゆとりでも詰め込みでもありません」とし、「生きる力」を育むという理念のもと、基礎的な知識や技能の習得とともに思考力・判断力・表現力などの育成を重視することとしました。授業時間が増やされ、全ての科目の基礎に「言語力の育成」が関わり、体力低下を防止するため、保健体育の時間数も増やされました。

このようにみると、戦後の児童中心主義→詰め込み教育→ゆとり教育→生きる力教育というように、学習指導要領は緩急つけながら、その時々で必要と思われるものを探すように変化してきたのがわかります。

多少乱暴ですが、戦後の学習指導要領の歴史をいくつかにかけて、社会状況と20歳前後の学生はどのように変化してきたのかを見てみたいと思います。

詰め込み教育の時代

今でこそ詰め込み教育と批判的な名前と呼ばれますが、当初は社会から必要と考えられて始まった教育です。戦後の発展、高度経済成長の波と、それに伴う科学技術の発展に乗り遅れまいと、必死に子ども達に

勉強をさせ、受験戦争が起こるまでに発展しました。

1960年代の中盤頃から、新幹線や高速道路などのインフラが整備されはじめ、地方から都会へ多くの人が入り、産業構造が大きく変化しました。しかし、人々のメンタリティは、それまでの伝統的な文化を尊重する性格を持ったままだったのです。そんな中で教育指導要領は、法的にも時間数的にも、より強い拘束性を求めるものとなりました。

このような背景があり、若者の中には「周囲の人とのしがらみ、古くからの制度が煩わしい」という気持ちが生まれますが、かといって「世間では常識とされている考え方」や「集団から外れた考え方」から外れると、生きていきづらい現実がありました。

これに加えて、詰め込み教育が行われるわけです。「古くからのしきたりやしがらみの関係性から逃れて一人で生きていきたいけれど、それはきっと無理だろう。今の自分にそんなことを考える余裕もない。」というあこがれとあきらめがあったのではないのでしょうか。

土井隆義は、当時の若者の悩みは一人になれる時間や場所がないことであり、それらは1980年代まで続いたとしています。「制度に縛られた濃密な人間関係」を嫌悪し、「一人でも生きられる人間は『一匹狼』として憧憬のまなざしで見つめられたのです。それは集団のしがらみからの解放を意味していたから」だとしています^{注1)}。

当時の流行歌はいわゆるフォークソングやニューミュージック。確かに、閉塞した時代に対する反感や、自由な生き方を求めた曲が多いように思います。1980年代の初頭には、尾崎豊がカリスマ的な人気を得て

いました。

ゆとり教育の時代（前半）

私自身が義務教育をすごした80年代中盤から90年代初頭、ゆとり教育の初めの頃、ちょうど「新学力観」という言葉が出来る直前でした。詰め込みから一転、子どもひとり一人の個性を見つめる教育が尊重されました。

この時代、いわゆるバンドブームがありました。当時、人気があったアーティストは、ブルーハーツやプリンセスプリンセス、ジュンスカイウォーカーズ。たまや米米クラブ等も人気でした。どの流行歌にも、

「普通”って何？“みんなと一緒”って何？個性が大事でしょ！！」

といった歌詞や、

「これが私の個性です！」

といった強烈な表現があちらこちらで見られ、もてはやされました。

ロックバンドは反体制を歌うものだと思うのですが、上記の点を見ると、まさに体制の権化である学習指導要領と、言っていることは同じというのが興味深いところです。

現在20歳の方は、1998年に改訂され、2002年から実施された学習指導要領のスタートとほぼ同時に義務教育をはじめます。ゆとり教育の最後のあたりの教育を受けてきています。

この時話題になった「総合的な学習の時間」の趣旨は「各学校は、地域や学校、児童の実態等に応じて、横断的・総合的な学習や児童の興味・関心等に基づく学習など

創意工夫を生かした教育活動を行う」ものとされており、そのねらいとして「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること」「学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること」「各教科、道徳及び特別活動で身に付けた知識や技能等を相互に関連付け、学習や生活において生かし、それらが総合的に働くようにすること」の3つが挙げられています。

この内容から判断すると、今の20歳前後の人は「人と比べてどうか、と比較するより、自分の思いや考え、興味や関心をしっかり持って、それを表現しなさい。」といった、まさに個性を尊重した教育を受けて来ていると言えます。

ところがこの時代、教育分野が個性に着目するのに対して、若者文化の方は、個でいるよりも、みんなで集まって賑やかに元気にいこう、というような動きがみられたように思います。個性の大切さを訴えるロックバンドは徐々に姿を消し、2000年をすぎたあたりで、AKB48や、EXILEなどの大規模グループが、グループ内での人間関係などの物語性も含めて、人気が出てくるようになりました。

生きる力教育の時代

2008年からの現行の学習指導要領は、詰め込みでもなく、ゆとりでもない、1998年に提示された「生きる力」というキーワードを中心に据えて、実施されています。こ

れはいわば、社会性をもった人間への教育を目指しています。

現在の若者は、デジタルネイティブであり、テレビやインターネットなどから、あふれるほどの情報を享受する日常を過ごしています。これにより、「この世の中には、沢山の価値観があって色んな人がいる」ということを、もう重々理解しています。そのさまざまな価値観を持つ他者と、意見を擦り合わせ、一緒に何かを成し遂げていく難しさもわかっています。そして、そのようなことを行っていくことが社会では必要だという事も認識しています。

音楽シーンを見れば、嗜好は大変多様化しており、流行らしい流行はあまり見受けられません。皆自分の好きな音楽を好きなように聞いています。

そう言えば、「個性を大事にしてほしい」とか、「これは私の個性なんだから、認めてよ!」といった発言をする学生も10年前と比べて、かなり減少した…というよりは、ほとんどそのような言葉を聞かれなくなったように感じます。個性に着目する教育から、社会性を志向する教育に変化し、子ども達の目が個性という方向に向かなくなってきたためではないかと推察されます。

社会の移り変わりとともに

「詰め込み教育」時代に対する、「1人になりたい」時代。

「ゆとり教育」時代に対する、「個性を求める」時代。

社会の移り変わりとともに教育は変化します。教育が変化すると、子どもや若者の

心にも大きな影響を与えます。若者の文化を見てみると、教育されたことをまずは受け入れ、やがてその逆方向を「成熟」と捉え、教育されたものの上に構築し、自らバランスをとろうとするような力が働くのは、大変面白いなあと感じます。

例えば教員歴 10 年の人が、それまで蓄積してきた教育に代わって、突然来年から新しい学習指導要領に基づいてやりなさい、といわれても、たとえ研修などが行われていたとしても、急に教行く方針を変えることは難しいのではないかと思います。

「一人一人の個性を尊重した教育をするぞ」と言う教員に対して、

「そんなの面倒くさいよ」と言う子どもがいて、これに対して教員が

「みんなで個性を尊重した教育をしようとしているのに、なんで一緒にやらないんだ」と注意した、という、笑い話を聞いた事があります。

2002 年から始まり、2008 年から本格化した「生きる力」教育についても、今やっと定着し、学生が「社会性って大事だよ」と意識しはじめ、冒頭の私の授業での発言につながって来たと思うのです。

文科大臣がうち出した今後の方針

平成 28 年 5 月 10 日、馳浩文部科学大臣が『教育の強靱化に向けて』を発表しました。この文書は、今後の教育のあり方について書かれたもので、平成 32 年から順次実施される次期学習指導要領の方針についても触れられています。

文書は 2 つの項目から構成されており、

一つは「次世代の学校・地域創生」の実現」、そしてもう一つは「社会に開かれた教育課程の実現」となっています。

今度は 2008 年からの社会性を志向させる方向をさらに推し進めるようです。

まさに私達が、「個性って大事だよ」という考え方が広まって来た頃に「個性をいかした教育」が提示されたように、「社会性って大事だよ」という事を感じている若者が増えている中で、「社会性」が提示されています。

「社会性」に対する若者のアンチテーゼのような動きは、まだ明確には見えていません。しかしこれまでのパターンだと、社会性とは逆の方向を目指す動きが出てくるのではないかと推察されます。

さて、この新たな学習指導要領に基づく教育を受けた子ども達は、どういう社会状況の中で、どのような子ども時代を過ごし、そして、何ができることを「大人」と考えていくのでしょうか。ちょっと怖いような楽しみなような気持ちでいます。

.....

引用文献

注 1) 土井隆義「つながりを煽られる子どもたち——ネット依存といじめ問題を考える」岩波ブックレット 2014 年 6 月

参考文献

野崎剛毅「学習指導要領の歴史と教育意識」
國學院短期大学紀要 第 23 巻
P151-P171 2006 年 3 月

文部科学省ホームページ